



その6

コーヒーを飲んで森林を守る

京都大学農学研究所・農業食料組織経営学

辻村英之

タンザニア・キリマンジャロ山の アグロフォレストリー「キハンバ」

筆者はタンザニア北部・キリマンジャロ山の西斜面にあるルカニ村（標高約1500〜1700m、人口1482人、世帯数355戸）において、20年前からほぼ毎年、コーヒーをはじめとする多様な農林畜産物の生産・販売をめぐる調査研究を続けている。本論で焦点を当てる、キリマンジャロ住民（チャガ民族）の伝統的な農法（農地利用形態）であるアグロフォレストリーの魅力についても、いち早く見いだしており、世界へ発信したいと考えていた。

しかし筆者がその役割を果たす間もなく、同アグロフォレストリーはすぐに、世界から注目されるに至った。例えばスイスの環境・開発NGOであるバイオビジョン財団は、世界のアグロフォレストリーを、①農林システム（林木と農産物の複合）、②林畜システム（林木と牧草・家畜・灌木の複合）、③農林畜システム（林木と農産物と家畜の複合）に3区分した上で、キリマンジャロのアグロフォレストリーを「チャガ民族のホームガーデン」と呼称し、③の代表事例として位置付けている。



キリマンジャロ山とアグロフォレストリー「キハンバ」

そして2011年、キリマンジャロ山中部部のシンブウェ・ジュウ村のアグロフォレストリー（チャガ民族の「キハンバ」システム）が、国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産（GIAHS）の認定を受けた。FAOは5つの基準（①食料・生計の安全保

障、②農業関連の生物多様性、③地元の伝統的知識システム、④文化・価値システムと社会組織、⑤景観の特徴）に基づいて、「世界的に顕著な特徴を有し次世代に受け継ぐべき遺産価値のあるもの」とみなし、GIAHSを認定している（注1）。

本論ではまず、同村の「キハンバ」（筆者は「家庭畑」と和訳している）が右記の5基準を満たしていることを、FAOの評価に基づいて確認する。

世界農業遺産に認定された理由

（1）基準①「食料・生計の安全保障」

地元の基礎的食料であるバナナ、芋類など多様な食料作物を生産できている。樹木は、地元の飼料、薪、材木などの需要を満たすことができる。またコーヒーが主要な換金作物になっている。家畜が家族の栄養水準を高め、牛乳販売が農業収入を増やしている。

（2）基準②「農業関連の生物多様性」

500種以上（栽培は100種）を保全する高い生物多様性を誇る。高いバイオマス（生物量）・有機物循環が、地上部及び

地下部での炭素蓄積に貢献している。林木や密な植生は、キリマンジャロ山が同地域の給水塔としての役割を果たすのに貢献している。

(3) 基準③「地元の伝統的知識システム」
熱帯林に類似の多層な植生を持つ。主に4層で、木陰、飼料、果物、薪、窒素固定などに役立つ林木が最上層、2層目にバナナ、3層目にコーヒーの木、最下層に多様な野菜がある。この多層システムは、不足する土地の利用を効率化し、多種の食料を周年で供給する。

(4) 基準④「文化・価値システムと社会組織」
チャガ民族は家族で管理する「キハンバ」を、自らの文化の中心であると考え、強いこだわりを持っている。社会的、儀礼的生活の中心地であり、ここで生まれ、年を取り、結婚し、埋葬される。

(5) 基準⑤「景観の特徴」
熱帯林に類似の多層な植生構造という独自性が顕著である。「キハンバ」のための伝統灌漑かんがいの水は、山奥の森林を水源とする小川や水路から流れてくる。

「コーヒー危機」と「キハンバ」の崩壊

(1) ルカニ村における「キハンバ」の残存
キリマンジャロ山中には約600の村があり、アグロフォレストリー「キハンバ」の伝統を共有している。シンブウェ・ジュウ村だけがG I A H S認定を受けた理由は、既に「キハンバ」崩壊の村が多い中、伝統的、典型的なものが残っているからだと言われている。

筆者が調査するルカニ村においても上記の5



家屋を取り巻く平均1haの「キハンバ」＝被陰樹の下でのコーヒー生産

基準を満たす、「世界的に顕著な特徴を有し次世代に受け継ぐべき遺産価値のある」「キハンバ」が残存している。さらに農業経営学の視覚から、環境保全性の高い農法や、高い資源循環性（バナナの茎・葉を家畜の飼料とし、家畜堆肥をバナナ・コーヒーの根元に投入するなど）が実現する低費用（高価な化学肥料・購入飼料を利用しない）農薬など、魅力を上乗せすることができると言える。

しかし他村同様、「キハンバ」の崩壊が進み、それを憂いて始まったコーヒーのフェアトレードプロジェクトが、崩壊をせき止める役割を果たしている。

そこで本論後半においては、ルカニ村を事例とし、「コーヒー危機」を「キハンバ」崩壊の直接的な要因と位置付けた上で、村民自身によるコーヒー産業や「キハンバ」の復興の取り組みをフェアトレードが後押ししていることを説明し、キリマンジャロコーヒーを世界一愛好する日本の消費者と、キリマンジャロにおけるコーヒー生産や森林・アグロフォレストリーとのつながりを強調したい。

(2) 取引構造をより不公正にする「コーヒー危機」

植民地時代に確立された生産国・生産者に不利なコーヒーの取引構造（安い生産者価格のおかげで、先進国・消費国における安いコーヒー飲用が可能になっている構造）は、大きく変わっていない。私たち消費者が楽しむコーヒーの香味の3〜4割を、生産者による原料豆の栽培・一次加工が形成すると言われている（注



トウモロコシへの転作—後方のコーヒー畑とは対照的に森林伐採が進む

するためにコーヒー生産を続けてきた。しかしその生産者価格（生産者による販売価格）も最安値水準となり、私たち消費者が支払う450円のうち、約0.5円しか生産者に渡らないようになった。しかもこの状況が3年間続いたことで、コーヒー生産で教育費を満たせないことがあからさまになり、若者たちが中心になって街への出稼ぎ（離農）やトウモロコシへの転作を一気に進めてしまった。

「キハンバ」が不可欠なコーヒー栽培

コーヒーの木は直射日光を嫌い、木陰を不可欠とする。前述のように「キハンバ」は4層構造になっており、最上層の林木と2層目のバナナが、3層目にあるコーヒーに木陰を与える庇陰樹ひいんじゅとして機能してきた。その一方で転作したトウモロコシは、コー

ヒーとは対照的に直射日光を求める。邪魔になる林木やバナナが伐採され、「キハンバ」の崩壊が進んでしまった。コーヒー販売に代わる収入源としての材木販売も、森林伐採の要因に

なっている。

このようにルカニ村においても、「コーヒー危機」を直接的な要因として、村民たちはコーヒー栽培を断念し（ルカニ村におけるコーヒーの収穫量は半減）、アグロフォレストリー「キハンバ」の崩壊につながる林木の過剰販売やトウモロコシの過剰生産を進めてしまった。

フェアトレード・消費者の役割

「フェアトレード」には国際的に共有されている定義や認証制度・基準があり、その定義・認証基準に基づいて「コーヒーのフェアトレード」を定義すると、「最低輸出価格保障とフェアトレード・プレミアム支払（産地の社会開発経費として利用）の二つの価格形成を基本的手段としてコーヒーの生産者価格を引き上げ、不利な状況にある途上国の小農民たちの生計・福祉改善・人権擁護・持続的発展をめざす提携型の交易」となる。

2007年から本格的に始まるルカニ村・フェアトレード・プロジェクト（注4）については、ルカニ村農協の理事と筆者が議論を重ね、

2)。それなのに、例えば1998年度において、1杯の「キリマンジャロ」に対する消費者の450円の支払いのうち、約2円しか生産者の取り分になっていない（注3）。

さらに2001～02年、世界最大の生産国・ブラジルにおける豊作やそれに基づく投機家の売り攻勢を主因とし、コーヒーの国際価格は史上最安値水準にまで暴落し（2001年12月に41・5セント／ポンド）、世界中のコーヒー生産者がさらなる貧困に苛まれる「コーヒー危機」と呼ばれた。

ルカニ村民を含むキリマンジャロコーヒーの生産者たちは、特に子供たちの教育費を確保



ココヤム・コーヒー・バナナ・林木の4層構造の「キハンバ」

前述の国際基準の下で140セント/ポンドの最低輸出価格を、171セント(「コーヒー危機」時の41・5セントの4・1倍)まで引き上げた。171セントの輸出価格が保障され、かつ収穫量を「コーヒー危機」前の水準(2倍)に戻せば、1世帯2人の子供たちを、下記のルカニ中学校に通わせることができるという議決からである。

フェアトレード・プレミアムについても、国際基準の20セント/ポンドよりも3セント多く支払って、ルカニ村のコミュニティ・センター(図書室、会議室、保育園など)、中学校、コーヒー加工・育苗場の建設費の一部など、社会開発の経費として活用されている。

特に、村民からの募金や政府からの支援で建設を始めながら資金不足で未完成だったルカニ中学校を、フェアトレード・プレミアムで完成させたことの影響が大きい。この身近で安価な中学校に子供たちを通わせる費用が、フェアトレードによって保障されることを知り、村民たちはすぐに、コーヒー生産の意欲を取り戻したのである。農協が主体となつて、まずはコーヒー(有機生産可能な耐病性を高めた新品種)の苗木、そして庇陰樹用林木の苗木を村民たちに配布し、コーヒー産業の復興に努めはじめた。「キハンバ」のさらなる崩壊は止まり、苗木の成長にともなつて森林や「キハンバ」も復興していく。

完全なる復興には数十年かかるが、街に出稼ぎに出た若者たちの帰村も進んで、「コーヒー危機」で25^トまで半減した収穫量が、危機前の



フェアトレード・プレミアムで後押しするルカニ中学校の建設

を大きく引き上げる(非フェアトレードの約1・5倍)。そこで同プロジェクトは、高価でも消費が進むように、コーヒー・スタディツアーを実施している。消費者にルカニ村に滞在してもらい、上記のような産地・生産者支援や森林保全ができるという、フェアトレードが上乘せる品質を、自らの目で確認してもらうためである。

このような新たな品質、すなわち「社会貢献できる」品質に対して積極的に関与を担う消費者は、「消費者教育推進法」(2012年施行)によって政府が育成をめざす「消費者市民」(「現在および将来の世代にわたつて社会経済情勢や地球環境に影響を及ぼし得ることを自覚して消費行動をする」市民)であると言える。「キリマンジャロ」の産地・ルカニ村における森林・アグロフォレストリーの再生は、同コーヒーの世界一の消費地・日本における飲用の仕方に依存しているのである。

水準を超える65^ト(2017年)にまで回復した。フェアトレード・コーヒーとして日本へ輸出しているのは高品質の原料豆のみ18^ト(1コンテナ分)であるが、今や2コンテナ分の輸出が可能になり、新たな販売先を見つけたす新たな課題が生じている。

ルカニ村・フェアトレード・プロジェクトの価格形成の基準に則り、日本に輸入するのは京都のキョウワズ珈琲である。ルカニ村農協からのより直接的な購入で、品質劣化の回避や流通コストの削減に努めているが、生産者支援のための高い購入価格はやはり、焙煎豆の小売価格

注1 Food and Agriculture Organization (FAO), *Globally Important Agricultural Heritage Systems (GIAHS)*, <http://www.FAO.org/GIAHS/en/>、速藤芳英「世界農業遺産の概要」第1・3回、FAO駐日連絡事務所、<http://www.FAO.org/japan/portals/sites/giahs/>

注2 例えば、堀口俊英「コーヒーのテースティング」柴田書店、2007年、7頁、辻村英之「増補版 おいしいコーヒーの経済論」太田出版、2012年、105頁。

注3 詳しくは、前掲書、98-106頁、を参照されたい。

注4 詳しくは、辻村英之「農業を買い支える仕組み」太田出版、2013年、第5章、キョウワズ珈琲株式会社、<https://www.kyowascjpb/for/kum/koyoku/prkan.htm>、などを参照されたい。